

「また浄土へいそぎまいりたきころのなくて、いさか所勞のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと、まことに、よくよく煩惱の興盛にそうろうにこそ。なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものを、ことにあわれみたまうなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じそうらえ。踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらいなまし」と云々

第9章 歡喜と悲歎の狭間に立つ

第2組 清浄寺住職

波佐谷 宏昭

text by Hiroaki Hasatani

弟子と師の問答

この第九章では、弟子の唯円が師である親鸞聖人に質問します。それは、「念仏申しても、歡びの心がなく、浄土に生まれたいと思わないのですが、いったいどうしたことでしょうか」ということです。それに対して、親鸞聖人は意外にも「親鸞にも同じ疑問があったが、唯円も同じ疑問があったのだなあ」とおっしゃっています。この両者に共通して生じた、「念仏申しても歡びの心がなく、浄土に生まれたいと思わないがどうしたことか」という疑問は、本願に出遇い念仏申す身となったからこそ、生じる疑問なのでしょう。

欲生我国

そして、親鸞聖人は、「煩惱具足の私たちは、念仏を喜べず、浄土に生まれたいという思いも起こらない。それは煩惱の^{しわざ}仕業だ。しかし阿弥陀仏はそのことを知り抜き、煩惱具足の為の本願を立てられたのであるから、かえって間違いなく往生出来るといよいよ頼もしく思う」とおっしゃっています。

それは、「私たちは煩惱具足の凡夫であるから、念仏申しても喜べないのは当たり前だ。浄土に往生したいと思わないのが凡夫の心だから、それでいいのだ」

ということではないのでしょうか。煩惱具足の凡夫は、浄土を願うべきでありながら、浄土に生まれたいと思わない。阿弥陀仏はそのことを承知の上で、私たちに「我が国に生まれんと欲え」と願っているのです。

本願念仏に生きるということは、浄土に目覚め、浄土にてらされながら、この穢土において、浄土を願って生きるということなのでしょう。しかし、現実には私に、心の底から浄土を願い続けるということがありません。浄土を学び、浄土から「共なる世界」を教えられながら、私の中に「共なる世界」を願い続けることがないのです。大震災によって深刻な災害を被った方々に対して「寄り添い続けたい」ということもなく、また、政府の閣議決定によって、日本が自ら他国の戦争に参加できる国になっても、声が枯れるまで「反対を叫び続ける」ということもありません。しかし、そういう自分をそれで良しとさせない、共なる世界へと促す「浄土のはたらき」を感じるのです。

既にしています悲願

親鸞聖人は、『教行信証』「信巻」に、

愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし、と。

(聖典二五一頁)

と、念仏に生きる身となりながら、そこに喜びがないことを、悲歎されています。しかし、その反面、『教行信証』「総序」には、

真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

(聖典一五〇頁)

と、本願に出遇えた喜びを記しています。この矛盾は、親鸞聖人は、念仏の信心の生活の中で、時には本願を仰ぎ、喜びを感じ、また時には、念仏申す身を喜ばず、浄土を願うことのない自身を懺悔、悲歎されたということなのでしょう。

念仏申す生活とは、本願に出遇った喜びと、本願に背き続けようとする思いが交錯する生活であり、仏に育てられている自分が、本願に背き続ける自分と闘い続ける生活なのでしょう。親鸞聖人という方は、生涯、「歎びと悲歎」という二つの矛盾の狭間に立ち続けた人なのではないかと思えます。